

福田徳三を読む

——黎明期における経済学の開拓者

「アダム・スミスが世界の経済思想史において巨峯であり、そこから出発してもよいと同じ意味で一橋で、いな日本では福田徳三から出発することにしてもよいかと思う。」(赤松要)

福田徳三(1874-1930年)は、経済学を中心に一橋大学の学問史、日本の社会科学形成史上において、枢要な役割を果たした。明治20年代の東京高等商業学校に学び、20世紀への変わり目に留学した福田は、ドイツ歴史学派の強い影響下にありながら、同時代の世界の学問成果を吸収し、それを彼自身と多くの門下生を通して日本のアカデミズム・知識人層に定着させ発展させた。

福田はまた、「ベルリン宣言」(1901年)を主導し、高等商業学校の商科大学への昇格、Captains of industryの養成に力を尽くし、さらに彼は「象牙塔内の智者たるに止まらず、社会厚生のために一身を捧げたる一大学者にして又一大運動者」であった。福田の公刊された著作は、一万数百ページに及ぶ六集八巻からなる『経済学全集』(1925-26年)、及び独文の『日本経済史論』、遺作となった大著『厚生経済研究』(1930年)などがある。彼の著作については、昨年10月の『一橋論叢』所収の書誌(金沢幾子)に詳しい。

厚生経済・社会政策： ルーヨ・ブレンターノ、 福田徳三／共著『労働経済論』

福田は56歳の生涯を閉じる2カ月前に公刊した『厚生経済研究』の序文で、「私に残された唯一の道は、ホブソン、ピグー、キャンナン諸先生が荆棘を拓かれた厚生経済理論への進出」だと書いた。この書は、恩師ブレンターノに献呈するために企画されたが、「抑も厚生経済と云う考へ方は、経済学を始めて以来多少は有つていた」という。労働問題を中心に発展した福田の厚生経済・社会政策思想は、ドイツ留学中の1899年、彼が弱冠26歳の時にブレンターノのもとで公表した処女作『労働経済論』にまで遡る。あるいはそこで自ら言うように、「労働条件と生産力との関係」を中心にした社会厚生的な考え方は高等商業学校時代から懐いていたようである。そのことは、彼が本科3年時に提出した群馬及び栃木(足利)の養蚕製糸織物業の分析を中心とした「修学旅行報告書」第1巻(1894年)に明らかである。「一國徳義ノ進歩ハ即チ一國生産ノ進歩ヲ誘導スル」と言うこの報告書では、マーシャルの『経済学原理』(1890年)がしばしば参照されているが、福田の高商時代の愛読書はドイツのロツシャーと共にイギリスのマーシャルであった。「労銀・労働時間の生産力に於ける関係の研究は、社会改革上の諸問題の始にして而して終なり」という

ブレンターノの諸説を紹介する『労働経済論』は、「数百万の蒼生を遙かに高き文化の度に高むるの分を有せる社会的改革は、亦国民の経済上・政治上の優勢の確定を招致するの力ある事是なり」と結ばれている。

価格闘争より厚生闘争へ： 厚生経済学から福祉国家へ

福田は、経済学は「人間と富との関係を研究するもの」で、社会を構成する人々の能力発達の物質的基礎を研究するものとしたマーシャルに惹かれた。福田の『経済学講義』はほとんどマーシャル『経済学原理』の祖述であった。そして、福田はピグーの『厚生経済学』(1920年)に惹かれるが、ほぼ同じ頃自らは『価格闘争から厚生闘争へ』(1921年)[翌年『社会政策と階級闘争』に収録]を書い



明治34年ベルリンにて
左から：津村秀松、関一、福田徳三、瀧本美夫



明治42~3年頃の福田徳三：野村口萬理子氏所蔵

て、マーシャルやピグーの価格経済学を批判した。福田が価格経済学と厚生経済学とを区分し、厚生闘争を主張する背後には、「生存権の認証」、「生存権の社会政策」、ウェブ夫妻が言う「国民的最低限の説」があった。生存権を認証し確保することが社会政策の原点であり、労働争議は単なる価格闘争ではなく、生存権を保障する人格闘争・厚生闘争たるべきであった。また福田の社会政策の基礎にはシュタインを先駆とする「社会の発見」があり、国家の範囲を弾力化して、「社会」の発達にその占めるべき位置を与えるという思想があった。厚生経済学というと、ピグーに始まる厚生経済学を連想するが、福田はそれにはむしろ批判的で、福祉国家を目指していた(山田雄三)。福田はケンブリッジのピグーよりも、オクスフォードの伝統を汲むホブソンやキャンナンのようなLSEの倫理主義的な福祉の経済学により強く惹かれたが、それは同時代のアメリカの制度主義的な経済学者と軌を一にしていた。